はぎわら

むかしむかし、壱岐の八幡の長者原に、おじいさんとおばあさんがすんじょった。

ふたりは、子どももなく、まずしいくらしやったばってか、正じきもんで、りゅうぐうをまつって、年のくれには、かどまつやしめなわば、りゅうじんさまにおそなえしよった。

そん年のくれも、いつもん年と同じごと、おそなえばして、夜もふけたけん休もうてしよったときのことたい。とんとんとんと、戸ばたたくもんのおった。あけてみると、見知らぬ人の立っとらして、

「わたしは、りゅうぐうのつかいのものです。ついてきてください。」

と、言わすけん二人はついていくことにしたとさ。

そしたら、目の前の海の二つにわかれ、道ができたとさ。二人がびっくりしながらついていったら、やがてりっぱなりゅうぐうについた。そしち、りゅうじんさまん前につ

れていかれた。

「おまえたちは、正じきもので、毎年おそなえをしてくれた。おれいに、はぎわらという子どもをさずけよう。このはぎわらは、おまえたちのねがいをかなえてくれるりゅうぐう一番の宝物だ。どうかかわいがっておくれ。」と、りゅうじんさまが言わっしゃった。

子どものおらん二人は、よろこんではぎわらばつれて帰った。

そして、たいそうかわいがりよらした。こんはぎわらは、いくら注意をされてん、どろんこになっちあそんできて、よごれた足で家の中ば走りまわるこまった子やった。ばってか、おじいさん

とおばあさんの、はぎわらん頭ばなでながら、ねがいごとばさしたら、なんでんかなえてくれた。二人ははぎわらがかわいくてたまらんかった。

「ふうとか家のほしか。」

と、言うたら、りっぱなごてんのたった。金やぎんの宝物や、広い田んぼなども出してもらわした。おかげで、国一番の長者（大金もち）になってしもうた。しまいには、とうとう、

「もっと、わこうなりたか。」

と、たのんで、わかいふうふにまでなってしもうた。

いろいろなねがいごつがかなってしまった二人は、年のくれにおそなえをすることもわすれてしもうた。それどころか、ぴかぴかのごてんをよごすはぎわらのこつも、だんだんじゃまになってきた。

わかくなったおばあさんが言うた。

「ねえ、わたしたちゃ、ほしかもんのもうのうなってしもうたし、はぎわらばりゅうぐ

うにかえしまっしょうや。」

わかくなったおじいさんも、うなずき、

「はぎわら、りゅうぐうへ帰れ。」

と言うて、いやがるはぎわらを海へおいかえしてしもうた。

そのとたん、大きなかみなりのなり、ごてんはきえ、二人はもとのまずしゅうて、年とったふうふにもどってしもうたとさ。

平成十四年作成『道徳教材集』

（長崎県教育委員会）より